1Hジnn』Uuuuu9

# 世界が注目！憲法九条を守り、生かそう！

島九条の会通信

-

lllllllfllJJJJUnnnuuun皿 nnnnnnnnnnnnnnnnnn

第70回例会のお知らせ

NO.112 2025.5.30

島中学校区九条の会発行連絡先井川方編集井川敏郎 TEL • FAX 058-231-5293

前号てもお知らせした集会てす。膨大な「防衛」予算が国会てもあまリ問題になリません。沖縄・南西諸島の要塞化は各務原基地が身近な私たちとも、無縁てはなさそうてす。

,'トランプ政権のヘグセス米国防長官は「西太平洋（台湾？）て有事に直面した場合、日本は前線に立つことになる」語っています。市民の命・暮らしは軍隊て守れるのか？軍隊は何を守るためにあるのか？ 西太平洋（台湾？）有事て‘‘、まず最前線となるのは沖縄て｀す。そして佐世 保・岩国・横須賀・横田・三沢と「本土」に展開する米軍基地と自衛隊基地ヘ・・・・。米軍や自衛隊は沖縄から北海道に至る市民を守ってくれるのてしょうか？

島九会員の皆さん、ぜひ参加してください。軍隊について・戦争について考えましょう。沖縄てはもう「考える」段階てはなく、切実な問題になっているようてす。

．「沖員眉からi0年沖縄の軍事要畠化を考える」

話す人とき ところ参加費

武藤清吾さん（硫球大学名誉教授）

6月14日（土）14:00~16:00島公民館研修室（島ll学校体育信1昔） 無料（カンパ歓迎）

2025九条の会岐阜県交流会開催

5月18日岐阜市民会館て見出しの交流会(18回目）が、昨年に続いて開かれました。島九も含めて県内のおよそ20の九条の会（参加者は約70名）が参加し、それぞれの活動と現状を報告し交流を深めました。島九同様多くの九条の会が、高齢化と活動の担い手減少に悩みながらもそれぞれ工夫した活動を継続中て、私たちの参考になる報告が続きました。また数名の高校生が参加し、それぞれの平和への取リ組みを報告してくれ、会場の「高齢者」は希望を感じました。

各会の活動報告の前に日本福祉大・三宅裕一郎教授による問題提起と言うべき講演がありました。これからの運動の参考になりそうなのて‘ヽ、その中からいくつか紹介します。

三宅教授の問題提起

女私たちが訴える内容

〇いかに軍隊を使わせないようにするのか。「軍事力を完全になくす」ことは現在の「市民感覚」を考えると難しい、軍事力の「出番」を最大限なくすようなアプローチを訴えるのは？

0軍隊の本質を問いかける。沖縄戦ても明らかになったように、軍隊の目的は国民を守ることて‘‘はなく、国家を守ることだ。（うらへ）

2

o「抑止力」の実像を明らかにする。抑止力に上限はなく抑止力に頼る安全保障論は、際限のな

い軍拡競争をもたらす。

0身の丈にあった安全保陳の形を考える。現在進行中の自衛隊軍拡は、中国のそれに比べれば

「焼け石に水」レベルては。

0軍事衝突がどれだけのリスクを私たちの暮らしにもたらすかを問いかける。中国にも台湾にもたくさんの日本企業や大勢の日本人がいる。軍事衝突の代償はあまりにも大きい。

0長期的な歴史を通じた軍縮の展望をもつ。現状をすぐ打破てきないことを、諦めたり焦ったリすることなく次世代以降を見据えた「漸進的平和主義」の実践を。

# 女訴えかける方法

0相手を正面から否定せず、押し付けがましくならず。軍事力強化を主張する市民の側には安全保障に対する漠然とした不安があリそれは安易に否定てきない。相手の不安に「共感」しながら軍事力によらないアプローチを提起する。

0てきるだけシンプルな表現て問いかける。「戦争を避けるにはどうしたら良いか」「『防衛費』の増額は私たちの暮らしにどんなメリットがあるのてしょう」などなど。

島九会貝からの寄稿

母の戦争と私の思い M.S

2 0 0 4年中日新聞に（）し条を守る辿動を呼びか：ナる）小さな記事を見つけました。その頃憲法9条をどうしても守りたい、[l衛豚イラク派遣にも強く反対と思っていた時に、これこそ政党も宗教も問わずただ一点『）し条を守る』活動であり私が求めていた一歩だと、すぐに田中さん（田中良さん：岐島）し条の会呼びかけ人の一人・前島）し代表）の県／『前事務所に行きチラシを大旦にもらって了·ども劇場のお祉さん達にお渡ししました。最初の意見広告も出て日光コミセンでの会（九条の会準備会）立ち上げにも参加C家の塀にポスター、ベランダに丁・・作りの石板をヽ，＇：てかけました。ただ岐品の同世代の関心が強くなく、戦争の話もあまり知らず聞いてなくて唖然としました。視の世代が悲惨な戦争体験を多くしてないからでしょうか。

私の両親は名古屈の大須で育ち、父は名古屈城の近くにおりました。昭和8年生まれの犀は兵條さんの前で軍歌を歌いによく慰問に行った、バリバリの‘ポ国少女だったそうですC視や教師やお上の言う事が絶対正しいという教育を受げ、守るものだと思っていたようですが、鬼畜米英と教えていた先生達が戦後一転して令ての仙値観をひっくりかえし、器言や器））でえらそうにしていたのにあやまりもせず民千t義を教えている事に、世の中への不伍だらけとなり、最大の貨任者である天皇を絶対に許さないとよく話していました。私も了·供達の学校の式では決して「君が代」は歌えず、歌詞を変えてほしいとずっと顛っています。

儲は空襲の恐ろしさを次のように語っていました。「名古屈の空襲のすさまじい中を逃げまわり、たくさんの悲惨な現状を目の当たりにした。疎開先の岐晶では反良の堤防で、パイロットの顔がわかるほどの近さで繰り返し機銃掃射で狙われ、日の前で女性が焙たれてなくなった。岐旱空襲の翌日、森屈の女学校に行く道はまだ熱く、焼け野｝見の中に丸太のように立った焼けた人、川にも街にもなくなった人を見た。焼夷弾はシュルシュルと廿がして雨のように降って、屈根や壁にベタッベタッとくつつ< -在がする、恐怖と共にその在は耳に残っている。B2 9が(III I·機もくると、空は頁っ黒になり凄まじい爆咄で家も人も破壊される。頭やお腹が割れ、身体に板やガラスがささり、下足があちこちにぶら下がり目工も飛び出ている。防空塚など訂咄されれば何の役にも立たない。中1の級友は亡くなった両親をとたん板に乗せて迎んでいた。」

小さい頃より浴びるように聞いた戦争の実相は私の血肉に染み込み、無謀な戦いにつき進んだ人人の貞任や‘rいの上）悼部や上官への怒りを強く感じていました。権））に阿ることなく、長いものに巻かれず、大樹の陰にも寄らず、出る杭は打たれても同調せず、i'I分で考え、今を生きる大人としてやれるだけの半はしたと言えるような人生にしたいとは思いましたが、現実にはなかなかできません。それでもた＜さんの無念な思いや悲しみ、怒りや絶望から生まれた「憲法9条」はどうしても守りたいと強く思っていま丸 ※（ ）内は編梨者礼